

発展 信長の領国支配	学習指導要領の「内容」の(4)イ「織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係のあらましを通して政治や社会の大きな変化を理解させるとともに、武将や豪族などの生活文化の展開に気付かせる」に示す内容を学習指導要領に示していない内容として取り扱っており、不適切である。
1579年5月、信長は岐阜からこの城に移り住みました	信長が岐阜から安土に移った時期として不正確である。
城内を制定して	文章の意味が理解し難い。

発展

信長の領国支配



① 安土古城跡 (滋賀県安土町・東氏蔵) 山全体を一つの堀郭としていたようすがわかります。
② 大手道から見上げた安土城 (コンピュータグラフィックスで作成)
③ 復元された大手道 (2003年撮影) 大手道の全体像がわかるまで10年もの時間がかかりました。

織田信長が琵琶湖畔にかまえた安土城について、残された資料や発掘された品々から、当時のようすをうかがい、戦国武将の領国支配についてみてみましょう。

安土の地

長篠の戦いで武田軍に勝利をおさめた織田信長は、翌1576(天正4)年正月琵琶湖畔の安土山に壮大な城をきずきはじめ、約2年半にもおよぶ大工事のあと、1579年5月、信長は岐阜からこの城に移り住みました。信長は、このころすでに畿内を平定して天下統一を目指していたため、安土は勢力圏のほぼ中央であり、また、琵琶湖にのぞむ水陸交通の要所

であるため、本拠地には最適な地であったといえるでしょう。

安土城と領国支配

安土城が以前の城と大きく異なる点は、規模が格段に大きいことや、石垣づくりが取り入れられたこと、そしてはじめて天守閣がつくられたことです。それらからは信長の天下統一への意気込みや計画性をうかがうことができます。

しかしこの時期国内にはまだ、北陸の上杉氏、大阪の石山本願寺、中国の毛利氏と強敵をひかえていた信長は、迅速に戦場へむかうことができるようにと、家臣を城下に集め住まわ

(「発展 信長の領国支配」は、「深める歴史7 信長の領国支配」というテーマ学習として、該当箇所におく。

箇所番号25、26の指摘は箇所番号24の修正とあわせて示す。)

深める歴史 7

信長の領国支配



① 安土古城跡 (滋賀県安土町・東氏蔵) 山全体を一つの堀郭としていたようすがわかります。
② 大手道から見上げた安土城 (コンピュータグラフィックスで作成)
③ 復元された大手道 (2003年撮影) 大手道の全体像がわかるまで10年もの時間がかかりました。

織田信長が琵琶湖畔にかまえた安土城について、残された資料や発掘された品々から、当時のようすをうかがい、戦国武将の領国支配についてみてみましょう。

◆安土の地

長篠の戦いで武田軍に勝利をおさめた織田信長は、翌1576(天正4)年、琵琶湖畔の安土山に壮大な城をきずきはじめ、約2年半にもおよぶ大工事のあと、1579年5月に天守が完成すると、信長はここに移り住みました。信長は、このころすでに畿内を平定して天下統一を目指していたため、安土は勢力圏のほぼ中央であり、また、琵琶湖にのぞむ水陸交通

の要所であるため、本拠地には最適な地であったといえるでしょう。

◆安土城と領国支配

安土城が以前の城と大きく異なる点は、規模が格段に大きいことや、石垣づくりが取り入れられたこと、そしてはじめて天守閣がつくられたことです。それらからは信長の天下統一への意気込みや計画性をうかがうことができます。

しかしこの時、国内にはまだ、北陸の上杉氏、大阪の石山本願寺、中国の毛利氏と強敵をひかえていた信長は、迅速に戦場へむかうことができるようにと、家臣を城下に集め住



安土城とその周辺の地図 (複製: 東氏蔵)



安土城の天守閣「コンピュータグラフィックスで作成。内藤昌成提供。国立歴史民俗博物館蔵」



安土山下町中興書 安土の楽市楽座政策を許可するもの。一行目に「楽市」の文字が、最後に信長の印がみられます。(近江八幡市蔵)

まわせることにしました。発掘により館跡が確認されています。さらに兵士が戦いに専念できるように、家族も尾張から移らせ生活の場とし、また信長は多くの家臣と家族の生活を守り、商業活動をさかんにするによる利益を考え、岐阜についてこの安土でも楽市楽座政策をおこない、商人の自由な活動を認め城下に商人の移住をすすめました。

標高199mの安土山の山頂には天守閣がそびえる城が、山の中腹には豊臣秀吉など有力武将の館、ふもとには家臣団の屋敷、そしてよび集められたたくさんの商人・職人たちの家々がつらなる人口5000~6000人と いわれる城下町が建設されていきました。



岐阜の城下町 安土山山頂の城郭と山麓の屋敷、周辺には楽市楽座政策によって、商人たちも集住していました。こうしたようすは安土の城下町をイメージさせます。(岐阜市歴史博物館、提供)



安土城とその周辺の地図 (複製: 東氏蔵)



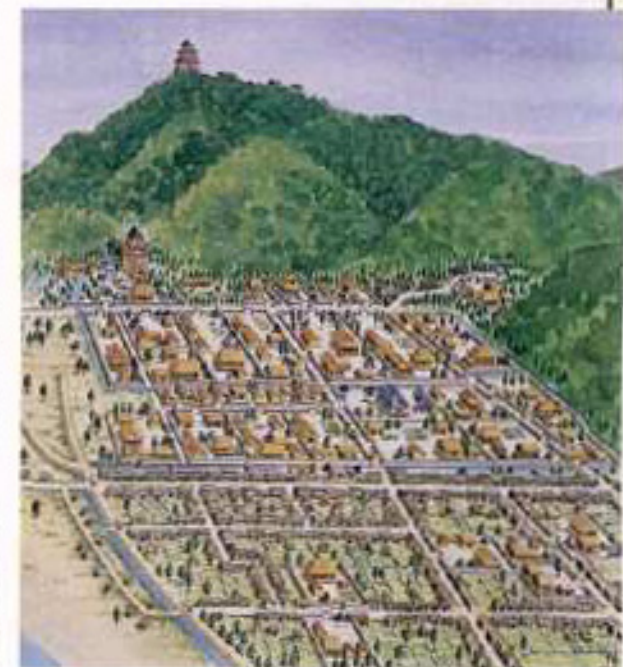
安土城の天守閣「コンピュータグラフィックスで作成。内藤昌成提供。国立歴史民俗博物館蔵」



安土山下町中興書 安土の楽市楽座政策を許可するもの。一行目に「楽市」の文字が、最後に信長の印がみられます。(近江八幡市蔵)

まわせることにしました。発掘により館跡が確認されています。さらに兵士が戦いに専念できるように、家族も尾張から移らせ生活の場とし、また信長は多くの家臣と家族の生活を守り、商業活動をさかんにするによる利益を考え、岐阜についてこの安土でも楽市楽座政策をおこない、商人の自由な活動を認め城下に商人の移住をすすめました。

標高199mの安土山の山頂には天守閣がそびえる城が、山の中腹には豊臣秀吉など有力武将の館、ふもとには家臣団の屋敷、そしてよび集められたたくさんの商人・職人たちの家々がつらなる人口5000~6000人と いわれる城下町が建設されていきました。



岐阜の城下町 安土山山頂の城郭と山麓の屋敷、周辺には楽市楽座政策によって、商人たちも集住していました。こうしたようすは安土の城下町をイメージさせます。(岐阜市歴史博物館、提供)